フランス文の明瞭性と調和

―語順の重要性―

加藤宏幸

日本文であれフランス文であれ，明瞭で調和がとれていなければ立派な文とはいえない。自分のためにのみ書かれた文であれば，明瞭性を欠いたとしても特に問題はないが，多くの場合，文は他人に自分の意思・感情を伝達するために書かれるのであるから，曖昧であってはならない。法律や条約の文章，そして多くの書類の文章は可能な限り明瞭であらねばならず，少しでも曖昧な点があれば，大きな問題を起こしかねない。文学作品についても，作家が意識的に曖昧な表現をする場合は別にして，その文は常に明瞭で，しかも調和がとれていなければならない。どんなに立派な思想であっても，またどんなに豊かな感情であっても，それらを表現する文が明瞭性と調和を欠いていれば，それらは読む人に忠実に伝達されることはなく，したがって読む人に深い感動を与えることはない。偉大な思想や豊かな感情が明瞭で調和のとれた表現をまとった時，読者はまずその表現に魅惑され，ついでその思想や感情を理解し，それらに感動するのである。読者が最初に受け取るのは表現であるから，例えば表現があまりにも難解すぎる場合には，読者はその表現を受け入れることができず，したがって思想などは問題にされなくなる。難解な思想は，難解な言葉や錯綜した文体でしか表現できないというのは誤りであって，難解な思想であればこそ，読者に理解できるように，いっそう明瞭に表現されなければならない。一般にものを書く人は誰かに向かって書くのであるから，まずその誰かを限定し，対象として定めた読者を常に心に留めて書かなければならない。

フランスにおける作文教育においては，特に次の点が重要視されているように思える。内容の面では，自分の体験に基づいて独自の考えを述べること，表現の面では，文が明瞭で調和がとれていること。この基準は一般にも容認されており，文の良否の判定は主としてこの基準によって行われているように思える。

フローベール Flaubert は，「余は高声に読み得る文のみをよき文章と認める。」[1] と述べている。声を出して読んだ場合，水の流れのように自然に心の中に入り込んで来る文こそがよい文であり，抵抗があってなかなか心の奥に届かない文は悪い文なのである。よい文とは，明瞭で調和がとれているだけでなく，多くの場合その文の音声がその内容と合致している。このような文は，韻文に多く見られる。音声と内容の一致について，ポール・ヴェルレーヌ Paul Verlaine の有名な「秋の歌」*Chanson d'automne* の第一節を例に取り，

少し論じてみよう。

Les sanglots longs	秋の日の
Des violons	ヴィオロンの
De l'automne	ためいきの
Blessent mon cœur	身にしみて
D'une langueur	ひたぶるに
Monotone.[2]	うら悲し。
	(上田　敏訳)

季節は晩秋である。冷たい秋風がヒューヒューと音を立てて吹いている。詩人は窓から風に舞い上がる木の葉をじっと眺めている。いつのまにか，気持が沈み，なんとなく寂しくてやりきれなくなる。

「秋のバイオリンの長いすすり泣き」Les sanglots longs Des violons De l'automne とは，バイオリンの音のような，物悲しく冷たい秋風の音を形容したものである。この比喩がこの一節を美しく引き立たせている。

すぐに気付くことであるが，この数行の詩句の中に，母音〔ɔ〕が6回，母音〔O〕が1回，鼻母音〔ɔ̃〕が3回現れる。詩人は〔ɔ〕，〔O〕，〔ɔ̃〕の音声を有する語を意識的に使用したと考えるべきである。それでは，〔ɔ〕，〔O〕，〔ɔ̃〕は人にどのような印象を与えるのであろうか。J・マルーゾー著『フランス文体論概説』によれば[3]，〔ɔ〕，〔O〕はゆったりとした l'ampleur，何かが鳴り響くような le retentissement 印象を与え，〔ɔ〕，〔O〕が鼻音とともに使用される場合には，〔ɔ〕，〔O〕の響きは鼻音の響きと合体して増大する。さらにマルーゾーは，鼻音は本来音楽的 chantant であり，〔1〕の音声が混じるとわびしさ langueur のニュアンスが生じる，と述べて，その例の一つとして Les *sanglots longs* Des vio*lons* De *l'*automne を挙げている。

音声がもたらすこのような印象を上の詩句に当てはめて考えてみると，〔ɔ〕，〔O〕，〔ɔ̃〕によって冷たく物悲しい秋風の音が表現されており，さらに鼻音に〔1〕の音声が配合されたことによって，秋風の音を聴いているうちに次第に悲しくわびしくなって行く詩人の心の内が表現されていると言うことができよう。「秋の歌」のこの一節を高い声で何度も繰り返して読んでみれば，内容と音声が正確に一致していることを感じとることができる。さらに注目すべきことは，一文からなる一節を構成している六つの詩句のすべてが，2語または3語で構成されており，きわめて短い。詩人はやはり意識して短い詩句を使用したと考えられる。木の葉が木から落ちる様や木の葉が風に舞う様を短い詩句で表現しようとしたのである。詩句を見て，読者は木の葉がヒラ・ヒラ・ヒラ・ヒラ・ヒラ・ヒラと散るあるいは舞う様を容易に目に浮かべることができるであろう。

「秋の歌」の第一節を構成しているこの一文について，次のような特質を列挙すること

ができる。①明瞭で調和がとれている。②内容と音声が一致している。③内容を視覚的に伝えている。④sanglots（すすり泣き）や violons（バイオリン）という語を比喩的に使用することによって豊かな芸術性が付与されている。このような文こそが完璧な文であると言うことができる。これは韻文であり散文とは形式が異なるけれども，優れた散文にも同じような特質を認めることができる。

一般に立派な文は，語順・音声・イントネーションなどの一般に容認された規則に従って作られている。この小論においては，主として語順の面から考察し，明瞭で調和がとれた文はどのような語順の規則に従って作られているかを明かにしてみたい。語順が文の明瞭性と調和にどのように関わっているかについては，文法書ではあまり論じられていないように思えるが，J・E・マンション著『現代フランス文法』においてはこの点に言及しているので，大変参考になった。

1. 疑問文とその答の文について考えてみよう。*Quand* irez-vous voir votre ami? という問にたいしては，J'irai le voir à Paris *samedi prochain.* と答え，*Où* irez-vous le voir? という問にたいしては，J'irai le voir samedi *à Paris.* と答える。後者の答の場合 samedi prochain とすると，samedi prochain の方が文末に位置する à Paris よりも音量が豊かになってしまうので samedi だけにする。音量については後で述べる。

疑問文においては，疑問詞はその文中でもっとも重要な要素であるので，文頭に位置し常に強さアクセント accent d'intensité をとる。答の文においては，quand の問にたいしては samedi prochain が，où の問にたいしては à Paris がもっとも重要な要素であるため文末に置かれる。疑問詞で始まる疑問文を別にすれば，フランス文においては，文末がもっとも重要な位置であり，そこにもっとも重要な語または語群が置かれる。

したがって，*Qu'*y a-t-il sur la table? にたいしては，Sur la table, il y a *un stylo.* と答え，Il y a *un stylo* sur la table. とは答えない方がよい。また，*Qui* joue dans le jardin? にたいしては，C'est *Pierre.* と答え，*Pierre* joue dans le jardin. とは答えない方がよい。

2. 文末の位置の重要性について，例を示してさらに説明してみよう。

ne...que は「...しかない，...だけである」の意で，完全な否定ではなく，主語以外の要素を制限する：Je *n'*ai *qu'*un livre. L'homme *n'*est *qu'*un roseau. Il *n'*aime *que* le théâtre classique. このような文において文末に位置する語は ne...que によって制限され強調されるので，原則として que の後に他の語を続けない。例えば，Il donne un crayon à sa sœur. という文を ne...que を用いて書き改めた場合には，Il *ne* donne *qu'*un

crayon à sa sœur. は避け，Il *ne* donne à sa sœur *qu'*un crayon. とすべきである。このことは次の例によっても明らかである：Mais de ces neuf cent quatre-vingt-cinq pages, Saint-Exupéry ne relut que *quelques-unes*. De sa vie, l'homme ne garde que *les souvenirs heureux*. De cet ancien temple, il ne subsiste que *des colonnes*. Mais le voyageur n'avait de la mer qu'*une connaissance limitée* (Green). Aujourd'hui il ne reste de ce château que *des ruines* (Beaumelou).

上の第一例と第二例を次のように書き換えることができる：Mais Saint-Exupéry ne relut que *quelques-unes de ces neuf cent quatre-vingt-cinq pages*. L'homme ne garde que *les souvenirs heureux de sa vie*. しかし，これらの文では限定がイタリックの部分のすべてに及び，文意が幾分曖昧になるし，文の調和も崩れるので，前者の方がよい文と言える。

原則として ne...que の構文においては，que に後続し制限を受ける要素は，他の要素から分離され，文末に置かれる。

3. 主語は文頭に置かれ，主語—動詞の語順となるのが一般的であるが，文末に置かれ，動詞—主語の語順となる場合がある。ある場合には，この語順しかとれないこともある。

Mon camarade venait. という文においては，文末が強調の位置であるから，venait（やって来た）という動作に力点が置かれ，Venait *mon camarade*. においては，主語 mon camarade（私の友人）に力点が置かれる。また非人称の il を用いて Il venait *mon camarade*. という文も可能である。この表現においても文末の mon camarade に力点が置かれているが，il にも幾分か人の関心が移るため，mon camarade の強調度は弱くなる。しかし，il が文頭に位置し，動詞が文の中心を占めているので，調和がとれた文となっている。

Un accident terrible et tragique est arrivé. という文よりも，Il est arrivé *un accident terrible et tragique*. の方が，事故のすさまじさが感じとれるし，調和がとれた文でもある。このように主語名詞に修飾語が付加された場合には，その主語名詞は特殊な性質を帯びるので，文末に置かれ強調されるのが自然である。

主語は文末に置かれることによって強調され，その重要性がより大きくなる。文頭に位置するのが普通である主語が，文末に位置することによって，不自然な感じを聴者または読者に与えるため，文末に位置する主語は人の強い関心を呼び起こす。

Alors, au milieu de ce silence inaccoutumé, monta *la petite voix frêle de Simon* (Maupassant).——主語が文末にあるために，沈黙の中に響く「シモンのか細い声」がは

っきりと聞こえるように思える。この文を Alors, *la petite voix frêle de Simon* monta au milieu de ce silence inaccoutumé. と書き改めた場合には，文末の「異常な沈黙」が強調され，「シモンのか細い声」は沈黙の中に呑み込まれて聞こえなくなってしまう。また，後で言及することになるが，事実の描写は既知から未知に及ぶのが自然であるので，最初に沈黙が存在し，つづいてシモンの声が沈黙を突き破って上がるのであるから，沈黙—シモンの声の順序で描写が進められるのが論理的である。したがってこの場合には，主語は必然的に文末に位置しなければならない。

A sa main dégantée brillait *le petit saphir* (Green). ——文末に主語が位置しているために，「小さなサファイア」の輝きが一段と増す。*Le petit saphir* brillait à sa main dégantée. とすれば，「小さなサファイア」の輝きは消え失せてしまうばかりでなく，「手袋をしてない彼女の手」が強く印象づけられ少し異様な感じさえする。また，まぶしい輝きを強調したい場合には，A sa main dégantée, *le petit saphir* brillait. とすればよいが，動詞が文末に来るので，文の調和は崩れる。しかし，調和が崩れることによって，「輝いていた」が返って強調されることにもなる。

Il faisait doux, le café m'avait réchauffé et par la porte ouverte entrait *une odeur de nuit et de fleurs* (Camus). ——文末に主語が位置しているために，部屋に満ちて来る「夜と花の香り」がはっきりと感じとれる。

Elle restait sur les genoux de sa mère pendant des heures; il ne sortait pas de sa bouche *une seule parole* (Philippe). ——「ただの一言」が文末にあるために，それに大きな重みが付され，母の膝の上で一言も発せずにじっとしている娘の姿が一段と鮮やかに浮かび上がる。... *une seule parole* ne sortait pas de sa bouche. とすれば，「ただの一言」の重みは薄れてしまう。

Alors, tout à coup, une grande lumière apparaît entre les arbres et de la lumière sort *une voix* (Beaumelou). ——光から発せられる「声」がはっきりと響き渡る。... et *une voix* sort de la lumière. とすれば，「光」の強さに「声」がかき消されてしまう。また，この表現は不合理である。なぜならば，前文においてすでに光の存在が確認されているのであるから，描写の順序は la lumière — une voix とならなければならないからである。

以上，主語が文末に置かれる場合の例をいくつか見て来たが，主語が文末に置かれた場合には，それにより大きな価値が付与された。このことによって，文末の位置の重要性が認識できるであろう。

4. 状況補語よりも主語が長い場合には，主語は一般に文末に置かれる：Binetôt vient

un grand garçon mince et une jeune fille élégante. 長い主語が文末に位置しているため，しまりのある，調和がとれた文となっている。また，文末に来た主語は，形容詞と一体となって強調されている。さらに，普通は文末に位置する bientôt が文頭に来るため，それも幾分か強調されるので，アクセントのある生彩に富んだ文となっている。

フローベールの次の文に注目しよう：*La façade de briques* était juste à l'alignement de la rue, ou de la route plutôt. Derrière la porte se trouvaient accrochés *un manteau à petit collet, une bride, une casquette de cuir noir,* et dans un coin, à terre, *une paire de housseaux encore couverts de boue sèche.* A droite était *la salle,* c'est-à-dire *l'appartement où l'on mangeait et où l'on se tenait. Un papier jaune-serin,* relevé dans le haut par une guirlande de fleurs pâles, tremblait tout entier sur sa toil mal tendue; *des rideaux de calicot blanc,* bordés d'un galon rouge, s'entre-croisaient le long des fenêtres, et sur l'étroit chambranle de la cheminée resplendissait *une pendule à tête d'Hippocrate, ...* 主語—動詞，動詞—主語の文が配合されて，変化と動きが生み出され，生き生きと躍動とした一節となっている。しかも，一節全体の均衡を考えての主語の到置であるため，不自然さはなく，全体が流れるように進行している。このように，主語の到置は，個々の文だけの調和のみならず，一節全体の調和も考慮して行われる必要がある。

5. 副詞は一般に，単純時制では動詞のすぐ後に，複合時制では助動詞と過去分詞の間に置かれる：Je travaille *beaucoup.* Il vient *souvent.* J'ai *beaucoup* travaillé. Il est *souvent* venu nous voir. また，不定法を修飾する副詞は，一般に不定法の前に置かれる：Vous feriez mieux de *plus* travailler. J'espère *bientôt* la revoir. しかし，副詞の位置は必ずしも固定されておらず，強調したり文に調和を与えたりするために，その位置をかなり自由に移動させることができる。Il viendra *bientôt.* という文においては，bientôt は文末にあって強調の位置を占めているが，一般的語順に従っているため強調が明らかでない。bientôt の強調を明確にするためには，*Bientôt* il viendra. とするか，Il viendra ici *bientôt.* とすればよい。また，主語が名詞である Pierre viendra *bientôt.* であれば，Pierre *bientôt* viendra. とすることができる。また，Il viendra *bientôt* nous voir. は，Il viendra nous voir *bientôt.* とすればよい。また，Il est *souvent* venu. は Il est venu *souvent.* とすればよい。

Il a *bien* agi. という文の bien を強調する場合には，どのような文に書き改めたらよいであろうか。bien という副詞は十分な音量を持たないため，Il a agi *bien.* と書き換えても bien はあまり強調されず，またこの文は十分な音量のない bien で終わっているためし

まりがない。bien のかわりに十分な音量を持つ副詞を使用して，Il a agi *admirablement.* とすればよいだろう。

他方，十分な音量を持つ副詞が助動詞と過去分詞の間に置かれた，Il a *courageusement* agi. はよい文とは言えない。十分な音量を持つ副詞は文末に置き，Il a agi *courageusement.* とすべきであろう。強調を明確にするには，*Courageusement* il a agi. とすればよい。

J'espère *bientôt* la revoir. という文で，bientôt を強調するには，J'espère la revoir *bientôt.* と書き換えればよい。しかし，Il faut *plus* travailler. という文の場合には，plus が十分な音量を持たないので，Il faut travailler *plus.* と書き換えても，plus はあまり強調されない。plus のかわりに davantage を用いて，Il faut travailler *davantage.* とすればよい。

副詞が強調されている例をさらにいくつか列挙してみよう。

Il traite ses invités *magnifiquement.* ——文末に位置している magnifiquement という副詞によって，「すばらしいもてなし」が感じとれる。*Amplement, naïvement,* il raconte tout ce qui le concerne (Barrès). ——文頭に副詞が遊離し，自分の身の上を「詳細に，率直に」語っている様子が明確に示される。《Moi, dit-il un peu plus haut, il faudra que je vive ici, *longtemps*》(Vercors). ——副詞が文末に遊離し，「長い間」の長さが相当なものに感じられる。Elle avait sept ans, *déjà* (Philippe). ——副詞が文末に遊離し，「すでに」には驚きの感情が含まれるようになり，間投詞的になる。Le petit frère, *goulûment,* s'emplissait d'un lait nourrissant (Philippe). ——副詞が文中で遊離し，「むさぼるように」乳を飲む子供の姿が生き生きと表現されている。*Très vite,* la nuit s'était épaissie au-dessus de la verrière (Camus). ——très vite が文頭に置かれていることによって，夜が大きなステンドグラスの上に「急速に」下りて来たことが分かる。Elle pleurait à petits cris, *régulièrement* (Camus). ——副詞が文末に遊離し，「規則的に」発せられる泣き声がはっきりと聞える。《Robert n'en sait rien, *naturellement*》(Maurois). ——副詞が文末に遊離し，「もちろん」と言った時の断定的な口調が表現されている。

副詞は一般に，それが限定する形容詞・副詞に先立つ: Elle est *très* jolie. Il est *bien* aimable. Elle marche *assez* lentement. Il agit *fort* bien. しかし，副詞を形容詞の後に置いて，Il est content *infiniment.* とすれば，喜びは倍加する。

6. *Bientôt* il viendra. *Courageusement* il a agi. 等の文に見られるように，副詞が文頭に位置し強調される場合がある。副詞以外の要素も文頭に来て強調される。文頭は文

末に次ぐ重要な位置であって，重要な語または語群によって占められる。文頭での強調の例をいくつか示してみよう：*Moi,* j'aime le café. *Cette jeune fille,* c'est ma sœur. *Qu'il soit travailleur,* cela m'étonne. *Le café,* je ne l'aime pas. *Votre critique,* je m'en moque. *Impétueusement,* il s'est élancé sur l'ennemi. *En une heure,* il eut terminé ses devoirs.

Moi, j'aime le café. という文は，J'aime le café, *moi.* と書き換えても，moi によって主語は強調されている。また，*Impétueusement,* il s'est élancé sur l'ennemi. も Il s'est élancé sur l'ennemi, *impétueusement.* と書き換えても，強調されている語は同じである。このように文頭に置かれて強調された要素は，それを文末に移しても同じように強調される。しかしながら，文末への移動が原則として不可能な要素がある。*Chose remarquable,* il était à l'heure. においては，「驚くべきことに」を意味する chose remarquable は，次に驚くべきことの具体的事実が来ることを示す指標であるから，常に文頭に置かれる。*En un mot,* je ne suis pas content de sa conduite. においては，「要するに」を意味する en un mot は，次に要約の内容が来ることを示す指標であるので，常に文頭に来る。

Le silence fut *profond.* という文を書き換えて，*Profond* fut le silence. とすれば，沈黙の深さは増大する。また，Sa joie fut *grande.* を *Grande* fut sa joie. とすれば，彼の喜びは倍加する。Il n'obéit *jamais* à ses parents. を *Jamais* il n'obéit à ses parents. とすれば，否定は一段と強調され，場合によっては，「両親の言うことを聞かない困った奴だ」の意味にもなる。

7. Il a agi bien. という文は，十分な音量を持たない bien が，文においてもっとも重要な位置である文末にあるので，しまりのないまずい文である。前述したように，bien のかわりに admirablement を用いれば，調和がとれた文となる。このことからも分かるように，文末に位置する語または語群は十分な音量を持っていなければならず，前の語に支配されてかすむようなことがあってはならない。

マンションは，Il revient d'un voyage *long.* という文は，文末に来る語が十分な音量を持たないのでまずい文であると言い，Il revient d'un voyage *prolongé.* とすべきであると言っている[4]。確かに，un voyage *long* では「長い旅」であっても，「短い旅」であるかのような印象を受けてしまう。

J'ai reçu mon ami à dîner avec une *grande* joie. —— une *grande* joie では「大きな喜び」が表現できなければ，une joie *profonde,* une joie *immense* を用いればよい。Les champs étaient couverts d'un brouillard *épais.* —— épais は十分な音量を持たないので，文末に位置するにはこの語だけでは不十分であるので，un brouillard *épais et im-*

mobile のように形容詞を二つ並置して十分な音量を持たせるようにすれば，「霧の濃さ」は増すであろう。J'ai encore pris du très *bon* café. ——J'ai encore pris du café *qui était très bon.* とすれば，「コーヒーのおいしさ」がより明確に表現される。Elle a une *très belle* figure. —— très belle は平凡な表現なので，「顔の美しさ」を引き立たせるためには，Elle a une figure *belle comme un dieu.* とすれば，美しさが引き立つ。この表現では，あまりにも美しくなり過ぎるのであれば，une figure *de toute beauté* とすればよいだろう。Elle a servi à ses invités un *bon* dîner. —— un *bon* dîner は平凡な表現なので，「夕食のすばらしさ」までは表せない。un dîner *magnifique* とすれば豪華な夕食となり，招待客を十分に接待したことをも表せる。

8. Mon ami *viendra.* のように動詞で終わる文は，それだけで完全な文であるにもかかわらず，不完全な文であるような感じがする。Mon ami *viendra* ici. とか Mon ami *viendra* demain. とか Mon ami *viendra* me voir. とか，動詞の後に補語が来れば，不完全な感じはしない。また，動詞が文頭に来た，*Apparut* mon ami. という文も，不完全な文であるような感じがする。Ici *apparut* mon ami. または Soudain *apparut* mon ami. とすれば，不完全な感じはしない。動詞が文頭や文末に来ると不自然な感じを受け，動詞が文の中心に来ると自然な感じを受ける。動詞は本来，その前後に来る要素を結合する働きがあるので，文の中心を占めるのが自然なのである。

疑問文について考えてみよう。次のような場合には，二つの疑問文が可能である：Comment *s'appelle* votre père ? Comment votre père *s'appelle*-t-il ? Quand *reviendra* votre frère ? Quand votre frère *reviendra*-t-il ? A qui *parle* votre sœur ? A qui votre sœur *parle*-t-elle ? これらの疑問文においては，動詞が文の中心を占めているので安定感がある。Comment votre père *s'appelle* ? Quand votre frère *reviendra* ? のような文末に動詞が来る疑問文は不安定であり，一般に使用されない。

《Enfin! *s'écria* mon frère, il est venu !》という文において，*s'*écria を文中に挿入するのも，動詞を文の中心に置こうとするためである。《Enfin! il est venu !》, *s'écria* mon frère. とすると，不安定な文となる。

調和がとれた文とは，動詞が文の中心に位置する文である。このような文には自然なリズムがあり，心よい印象を受ける：Mon bébé *dormait* profondément. Il *revient* de Paris. Mon père *rentrera* avant que je parte, Il m'*a parlé* à haute voix. Je *lisais* quand il est entré.

しかし，動詞を強調しなければならない場合には，自然のリズムを崩すことになるが，動詞を文末に置かなければならない。自然のリズムが崩れるが故に，返って動詞の強調度

が強まることになる。Devant la maison *s'étendait* une large pelouse (Mansion). という文は，une large pelouse（広々とした芝生）が文末に位置して強調されているし，*s'*étendait（広がっていた）という動詞が文の中心に位置しているので調和がとれた文である。しかも動詞 *s'*étendait は内容豊かな動詞であるため，「芝生の広がり」が絵画的に表現されている。s'étendait を était または se trouvait で置き換えてしまえば，平凡な文となってしまう。動詞 *s'*étendait を強調する場合には，Devant la maison une pelouse s'*étendait*. とすればよい。マンションは，文末に来る動詞は十分な意味内容をもつものでなければならないとして，Devant la maison une pelouse *était* (*se trouvait*). と言うことはできず，Devant la maison une pelouse *se déroulait*. と言わなければならない，と述べている[5)]。

文末は文中におけるもっとも重要な位置であるので，文末に位置する動詞は，その位置を占めるに足る十分な意味内容を持つ動詞でなければならない。さらにマンションは，この点について次のような例を挙げて説明している。Nous regardions l'horison, que le soleil couchant *embrasait*. という文を書き改める場合，Nous regardions l'horison, où un soleil embrasé *se couchait*. とすることはできず，. . . où *se couchait* un soleil embrasé. としなければならない。ここで重要なのは「真っ赤な入日」なのであるから，se couchait（沈んで行く）という意味内容の乏しい動詞を文末に置くことはできない。

他の例を調べてみよう。Au puce de sa main droite *brillait* une petite bague. という文を書き改めて，Au puce de sa main droite, une petite bague *brillait*. とすることは可能であるし，brillait（輝いていた）が弱ければ，éntincelait, scintillait, resplendissait を用いればよい。しかし，brillait のかわりに，十分な意味内容を持たない se portait（はめられていた）を用いることはできない。Du profond de son cœur *jaillissait* un sentiment d'amour fraternel. という文を Du profond de son cœur, un sentiment d'amour fraternel *jaillissait*. と書き改めることは可能である。jaillissait（湧き出て来た）のかわりに *s'*épanchait（あふれ出て来た）を使用することはできるが，十分な意味内容がない sortait（出て来た）は使用できない。

9. Le roi Georges V succéda à Édouard VII (Mansion). という文は，A Édouard VII succéda le roi Georges V. と書き改めることができる。しかし，二つの文がいかなる場合にも自由に使用できるわけではない。書き手または話し手がその時何について語っていて，次に何について語ろうとしているかによって，二つの文のうちの一方が選択されなければならない。国王ジョージ5世について語られているのであれば，例えば百科事典などにおけるジョージ5世の項などにおいては，Le roi Georges V succéda à Édouard

VII. と記述されるであろう。ところが，例えば歴史書などで，エドワード7世の治世が説明された後で，記述がジョージ5世の治世へと移行する場合には，A Édouard VII succéda le roi Georges V. という文が必然的に選ばれなければならないであろう。書く人または話す人の思考の流れに沿って，文は書かれ話されなければならない。この思考の流れが無視された場合には，一つの文を取り挙げた場合にその文が完全な文であっても，全体の中に挿入された時には，その文は遊離してしまうことになる。

他の例について調べてみよう。Alors, tout à coup, une grande lumière apparaît entre les arbres et de la lumière sort une voix (Beaumelou). この文の第二の文を ...et une voix sort de la lumière. と書き換えることはできない。第一の文にすでに une grande lumière（激しい光）が表現されているので，第二の文では la lumière—une voix（声）の順序で表現されなければ論理的でない。叙述は既知のものから未知のものへと発展して行かなければならない。

Il a fait des recherches profondes sur le marxisme. Et de cette doctrine sont résultées toutes ses doctrines économiques. —— 既知のものは第一の文の le marxisme（マルクス主義）であり，未知のものは toutes ses doctrines économiques（彼のすべての経済理論）であるから，第二の文では叙述は既知のものから未知のものへと進められなければならないので，主語の到置が必要である。マンションは，さらに次のような例を提示して，語順に関するこの決まりを説明している[6]。Peu après, César conquit la Gaule. という文は，César（シーザー）の歴史について語る時に用いられる。la Gaule（ガリヤ）について語る時には，Peu après, la Gaule fut conquise par César. という文を用いなければならない。

10. 付加形容詞の語順については，「個別的性質を表し，対象を同種の他のものと区別して識別の標となるもの」[7] は名詞に後続し，「簡単な印象評価を表わして名詞と密接に結びつき，いわば対象の呼称の一部をなすもの」[8] は名詞に先行する，という原則がある：une chemise *blanche*, le droit *japonais*, une *jeune* fille, des *grands* hommes. しかし，形容詞の語順は文体上のさまざまな理由によって決定されるので，上の原則も絶対的なものではない。

Un abri est ménagé dans la muraille *épaisse*. という文を書き改めて，... dans *l'épaisseur* de la muraille. とすると，文全体が引き締まるとともに，「壁の厚み」も増したような感じを受ける。また，Elle a été élevée dans le milieu *libre*. という文を書き改めて，...dans *la liberté* du milieu. とすると，「自由な環境」が強調されるように思える。このように，文学的な表現においては，形容詞を名詞に書き換えることがよく行われ

る。

ここでは，付加形容詞ではなくて，同格形容詞について考えてみたい。同格形容詞には決まった位置がない：*Heureuse,* la mère regardait son enfant jouer dans le jardin. La mère, *heureuse,* regardait son enfant jouer dans le jardin. La mère regardait, *heureuse,* son enfant jouer dans le jardin. La mère regardait son enfant jouer dans le jardin, *heureuse.* 同格形容詞は，その前後の要素から分離されれば，文中のどの位置にあっても強調される。同形格容詞の位置は，文の調和を考えて定められる。

Triste, elle lisait une lettre. または Elle lisait une lettre, *triste.* という文において，同格形容詞 triste（悲しい）は，主語 elle（彼女）の気持と同時に書き手または話し手の気持をも示す。すなわち，書き手または話し手が彼女と悲しみを共有し，彼女と一体となって悲しんでいる。同格形容詞のかわりに副詞を用いて，Elle lisait *tristement* une lettre. とすれば，書き手または話し手が，彼女と悲しみを共有することなく，悲しんでいる彼女の様子を客観的に語っていることになる。このように同格形容詞を用いると，書くまたは話す主体と表現された主体との精神的一致が生ずるので，文は主観的となる。

Et sa voix creuse et grave fit vibrer jusqu'au fond de ma poitrine, *inattendu et saisissant,* le cri dont l'ultime syllabe traînait comme une frémissante plainte (Vercors). ——同格形容詞の使用によって，「思いがけない，胸打つ叫び」が，沈黙の中にはっきりと響き，「私」の心を打つ様が鮮明に表現される。Une importante cargaison de matières premières assurait à la *Bonne Espérance* une position à peu près invariable, malgré l'agitation de la mer, et elle allait, *lourde et lente,* mais *ferme,* sous un ciel menaçant (Green). ——同格形容詞が使用されているために，「重々しく，ゆっくり，しっかり」航行している船がはっきりと目に浮かんで来る。副詞に置き換えて，lourdement et lentement, mais fermement とすると客観的表現となり，絵に描かれた船を眺めているような感じがする。Une seconde plus tard, je la tins dans mes bras, *légère et glacée* (Maurois). ——直接目的補語と同格である形容詞 légère et glacée（軽く，氷のように冷たい）によって，彼女の冷え切った体の冷たさが伝わって来るような感じさえする。

要するに，事実を主観的に表現したい場合には，同格形容詞を，客観的に表現したい場合には，副詞を使用すればよい。

次のような形容詞の使い方にも注目しておきたい。Cette jeune fille a les yeux *bleus.* という文においては，文末の bleus（青い）という形容詞が強調され，「目の青さ」が強く印象づけられる。文法的には，les yeux（目）が直接目的補語，bleus が属詞である。この文を Les yeux de cett jeune fille sont bleus. と書き改めることができるが，前者の方

が調和がとれた文であるし，bleus がより浮き出ている。Cette jeune fille a des yeux *bleus*. と書き換えることもできるが，bleus が付加形容詞として使用され，「目の青さ」よりも「青い目」の所有に重点が置かれることになる。

C'est Alice *la plus gentille* (Philippe). ——この文においては，まず Alice が強調され，ついで Alice の性質が同格的な形容詞 la plus gentille（もっともおりこうな）によって示されている。この文を Alice est *la plus gentille*. とか，C'est Alice qui est *la plus gentille*. とかに書き改めることができるが，Alice と la plus gentille が文中で離れてしまい，意味上での結びつきも弱まってしまう。C'est Alice *la plus gentille*. においては，Alice la plus gentille が強調されているだけでなく，Alice と la plus gentille が形式上も意味上においても密接に結び付き，アリスが「おりこうである」ことが明白に示される。

11. 口語文では，省略がしばしば行われる：Êtes-vous heureux ? — Oui. Où allez-vous ? — A l'école. Combien de crayons avez-vous ? — Trois. また疑問文においても，省略はまれではない：A qui ce crayon ? Quoi d'intéressant ? Pour quand cette cérémonie ? 文語文においても，十分な意味内容のない être, il y a 等はしばしば省略される。マンションは，次のような例を挙げている[9]。Le Colisée apparaît... Personne dans l'intérieur; un profond silence; rien que des blocs de pierre, des herbes pendantes, et de temps en temps, un cri d'oiseau. 動詞なしに，「深い静寂」，「石のかたまり」，「垂れ下がった草」，「鳥の鳴き声」が描写され，コロセウムの情景が的確に表現される。

省略によって，文は簡潔となり，強調されるべき要素が明確となる。

以上，フランス文の明瞭性と調和を考慮しながら，それらと語順との関わりについて考察してみた。考察の過程で明らかになった語順に関する規則は最小限の規則であり，これらの規則の制約の中で明瞭で調和がとれた文を作ればよい。他方，語順の規則というのは，明瞭で調和がとれた文を作るための制約でもあるので，それを遵守すれば，自ずから明瞭で調和がとれた文となる。しかしながら，この規則は，特に感情的な文においては守られないことが多い。規則に合致しないことによって，返って話者の感情が率直に表現されることにもなる。

例えば，Venez vite. Le train va partir. という文において，venez vite という動詞—副詞の語順は規則に合っている。しかし，もうすでに列車が動き出している時には，Vite! venez! と叫ぶであろうし，むしろこのような語順の方がこの場合には自然であろう。

感情的な文とはいかなる文を指し，またどんな点で普通の文と異なるのか，感情的な文はどんな語順をとるのかなど，感情的な文に関しての考察は小論では行わなかった。

さて，今までに述べて来たフランス文における語順の規則をまとめてみると，次のようになる。

①文末はもっとも重要な位置であり，もっとも重要な語または語群によって占められる。

②文頭は文末に次ぐ重要な位置であって，重要な語または語群によって占められる。

③文末に位置する語または語群は，十分な音量を持っていなければならない。

④動詞は，その前後に位置する要素を結合するので，文の中心に位置する。

⑤文末の動詞は，十分な意味内容をもつものでなければならない。

⑥文は思考の流れに沿って書かれ，話されなければならない。

⑦同格形容詞には一定の位置がない。

もちろん，上に挙げた規則は，フランス文における語順の規則のすべてではない。しかし，これらの規則に従って文を作れば，少なくとも明瞭で調和がとれた文ができるだろう。文はいかに明瞭で調和がとれていても，すなわち文の形式が整っていても，その内容が空虚であれば，その文は不完全である。文は形式が決まって，しかる後に内容が決まるのではなく，内容があってそれを伝える文の形式が決まるのである。それ故，語順の規則からはずれる場合も起こる。その場合でも，語順の規則から大きくはずれることがないよう留意しなければならない。語順の規則を無視しては，明瞭で調和がとれた文は生まれない。すぐれたフランス文を分析すれば，そのことが納得できるであろう。

注

1) マンション著『現代フランス文法』，304ページ。
2) VERLAINE, *Œuvres poétiques complètes*, p. 72.
3) MAROUZEAU, *Précis de stylistique française*, pp. 36–38.
4) マンション，前掲書，300ページ。
5) 同上書，301ページ。
6) 同上書，302ページ。
7) 朝倉季雄著『フランス文法事典』，35ページ。
8) 同上書，35ページ。
9) マンション，前掲書，335ページ。

主要参考書目

1. J・E・マンション著（田辺貞之助訳）『現代フランス文法』，大修館書店，1976年。
2. 朝倉季雄著『フランス文法事典』，白水社，1955年。
3. MAROUZEAU (J.), *Précis de stylistique française*, Paris, Masson et Cie, Éditeurs, 1959.
4. *Petit Robert*, Paris, Société du Nouveau Littré, 1977.
5. *Dictionnaire du français contemporain*, Paris, Larousse, [© 1966].
6. *Grand Larousse de la langue française*, Larousse, [© 1971–1977].
7. VERLAINE (Paul), *Œuvres poétiques complètes*, Paris, Gallimard, [© 1962.]